
我等は羊の夢を見る

藍沢光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

我等は羊の夢を見る

【Nコード】

N0577Y

【作者名】

藍沢光

【あらすじ】

『普通』を好む少年・天草司。
病を患う司の妹・天草陽香。

二人は、ごく『普通』の日々を過ごしていた。

だが、ある出会いにより、二人の運命は少しずつ動き出す。

これは、とある兄妹と、一人の『羊』の物語。

プロローグ（前書き）

こんにちは

藍沢光と申します。

現在二次創作の方で、仮面ライダーを書いているのですが、何を血迷ったのか、オリジナル作品を投稿させていただきました。

こちらは

月1くらいで更新しますので、のんびりまったり見ていただけると、ありがたいですね。

駄文ですが、よろしくお願いします！

プロローグ

「『人』の『夢』と書いて、『儂い』と読む？

そんなの嘘だね。

『人』の『夢』ほど、確かなモノはないよ」

最初に言っておくが、これは俺の言葉ではない。

これは俺の友達の言葉である。

俺が思うに、『人』の『夢』は『儂い』ものだ。

例えば、パイロットになりたい。

例えば、お花屋さんになりたい。

例えば、仮面ライダーになりたい。

例えば、お父さんのお嫁さんになりたい。

子供が持つそんな『夢』は、時の流れ、つまりは、成長によって脆くも崩れ去る。

中には、それを叶える奴もいるかもしれない。

だが、大半は挫折する。

無理だ、と。

できるはずがない、と。

俺にも『夢』があった。

だけど……諦めかけている。

今までの十七年の経験を踏まえて、『人』の『夢』は『儚い』。

そう言える。

だが、そいつはそれを否定した。

しかも、言っただけだ。

『儚い』のは、むしろ『現実』の方である、と。

もう一度言うが、これは俺の友達の言葉だ。

……いや。

友達ではないか。

可笑しな可笑しな奴。

『夢』に巣食う一人の『羊』の言葉である。

1：妹

ヒーローになりたい。

それが俺の子供の時の夢だ。

勿論、そんな夢を抱いていたのも、大体小学校に入るまでのことで、小学校に上がるとまた別の夢をみていた気がする。

まあ、幼い頃の夢なんてそんなものだろう。

だから、今それを振り返って懐かしみはすれど、恥ずかしがることも馬鹿にすることもない。

つまり

「天草！ あまくさつかさ 天草司！」

自分の名前が呼ばれたことで、はたと我に帰る。

「おい、天草！ 授業中にボーっとするな」

と、教壇に立って、数学の公式の証明をしていた教師が叫んでいる。

ああ。

そういえば、今は授業中だったか。

「……………すみません」

軽く頭を下げると、教師は黒板に向き直った。

一回、窓の外を見る。

もう午後だというのに、太陽が燦々と照りつけている。

暑い。

そんな暑さの中でも俺は、教科書に目を落とす振りをして、再び考えを巡らす。

つまり、あれだ。

叶わない夢は、ただただ微笑ましいだけ、というわけだ。

放課後になった。

放課後に一緒に遊ぶような親しい友達は、俺にはいない。

ただ

「おい！つかさっち！」

……はあ。

面倒なのに見つかった。

嫌々ながらも、一応、義理で後ろを振り向く。

そこにいたのは、

「やつほ！ 今、帰り？」

栗色のロングヘアに、人懐っこい笑顔。

そして、異様なハイテンションを携えた女がいた。

その名も、下地あかり（しもじあかり）。

俺の幼馴染みにして、我が校の生徒会長様である。

「見てわからないのか？」

「ん？ わからーん！」

「そうか、今帰りだ。じゃあな」

これ以上、こいつと関わるのは面倒だったので、そう言っこの場

を去ろうとする。

だが、

「それはないだろう！」

止められた。

しかも、凄い力で肩を掴まれる。
地獄万力と言っても過言ではない。

「つてえな！　なんだよ？」

「ん？　今日は司ん家行くから」

「は？」

「聞こえなかった？　だから、今日司ん家行くから！」

「……………」

さっきも言ったが、遊ぶような親しい友達はいない。

いるのは、迷惑な幼馴染だけだ。

俺の家は、一般的な一戸建ての一般的な住居である。

一応、二階はあるが、ただそれだけ。

驚くほど広くもないし、驚くほど狭くもない。

そこに住んでいるのは、俺と両親。

そして

「……ただいま」

「おっ邪魔しまーす！」

玄関のノブを回して、中に入る。

その後を、あかりが雪崩れ込むように入ってきた。

あかりのハイテンションな挨拶にも帰ってくる返事はない。

家の両親は共働きだから、それが当然だ。

靴を脱いで上がり、そのままキッチンへ。

冷蔵庫を開けて、麦茶をコップに注ぎ、一気に飲んだ。

太陽の熱で火照った体に、水分が染み渡っていくのが分かる。

「……………」

きつと暑かっただろうな。

そう思った俺は、コップに麦茶を注いだ。

一つは、さっき俺が使ったコップに。

一つは、氷を入れて。

そして、もう一つは、羊が描かれたマグカップに。

俺は三つの麦茶を持って、二階に上がり、二つある部屋の、俺の部屋じゃない方に入った。

そこには、先に二階に上がっていたあかりと、

「あ、お兄ちゃん。おかえり」

いつものように、青白い顔でベットに横になっている俺の妹・陽香はるかがいた。

俺の妹・天草陽香あまくさはるかについての話をしておこうと思っ。

元々、陽香は明るく気配りも出来、その上、勉強や運動も出来た娘だった。

クラスの、いや、学校の人気者と言ってもいいくらいだった。

だが、今から三年前、陽香が中学一年生になった時、

陽香は病を患った。

外を出歩くどころか、歩くこともままならないほどに体力がなくなり、それに伴い免疫力も下がる。

そんな病気だ。

様々な医者にかかったが、原因は一切不明。
治療をしようにも、本人の身体は健康そのものだったため、結局、精神的なものだろうと判断され、自宅で療養することになった。

だが、陽香は未だに治っていない。

死に至ることはないようだが……。

彼女の青春時代が病で消えてしまうのは、あまりにも可哀想だ。

可哀想、すぎる。

「ほら、陽香。麦茶持ってきたぞ」

そう言って、陽香にマグカップを渡してやる。
それを両手で受け取る陽香。

「ありがとう、お兄ちゃん」

儂げな微笑みだ。

今にも消えて、壊れてしまいそうな

「おーい！ 私にはあ？」

と、精神図太そつなやつが言う。

「……………ん」

適当に渡す。

すると、あかりは

「お茶菓子はあ？」

なんてほざきやがる。

図太いというか、図々しい。

これから持ってくるつもりではいたが、このまま言いなりのようになるのは、癪である。

だから、陽香に聞くことにしよう。

「陽香もなんか食べるか？」

「あ、うん。ちょっとだけ食べようかな」

「わかった。持ってきてやるな」

「ありがとう、お兄ちゃん」

陽香の言葉を聞いてから、部屋を出る。

「ふう」

扉を閉めると、ため息が出た。

暑い。

本当に暑い。

.....。

いや、それだけじゃないな。

このため息は焦りや不安だ。

陽香を見ていると、本当に感じる。

『夢』は『夢い』。

そう感じてしまう。

だって、俺の『夢』は、陽香が元気になることだから……。

それは、叶いそうにない、だけど、微笑ましくなどない、切実で『夢い』、『夢』だ。

2：凡

前にも言ったように、俺には放課後に遊ぶような親しい友人はいない。

それは、休日も一緒であり……。

「……なにしよう」

俺は現在、日曜日という一週間の中で最も喜ばしいであろう日を、部屋のベッドの上で堪能していた。

20

現在時刻、午前十時。

つまり、目が覚めてから約一時間が経過したわけか。

このまま、二度寝するのもいいが、如何せん暑い。

とりあえずシャワーでも浴びようか。

そんなことを考えた、ちょうどその時である。

ピンポーン

インターフォンが鳴った。

誰だろうか、と思いつつも、どうせ親が出るだろうと高をくくり、シャワーの用意を進める。
が、

ピンポーン

「……………」

ピンポーン

「……………」

ピンポーン

「……………」

ピンポーン

ピンポーン

ピンポーン

ピンポーンピンポーンピンポーンピンポーンピンポーン
ピンポーンピンポーンピンポーンピンポーンピンポーン
ピンポーンピンポーンピンポーンピンポーンピンポーン
ピンポーンピンポーンピンポーンピンポーンピンポーン
ピンポーンピンポーンピンポーンピンポーンピンポーン

「だあああ、分かった！ 分かりました！？」

急いで階段を駆け下りる。

途中でリビングを覗いたが、どうやら親は二人ともどこかに出かけているようだった。

つまり、現在家にいるのは、俺と未だに眠っているであろう陽香の二人だけ。

……しょうがない。

「はいはい、今出ますよ」

玄関までたどり着いた俺は、そう言って扉を開けた。

そこにいたのは、二人の女の子。

一人は、俺と同じかそれ以上に背が高く、まるでモデルか何かのような体つきをしたつり目気味な子。

もう一人は、前髪が目にかかるくらいに伸ばし、びくびくとした様子で挙動不審に陥ってる子。

「おはようございます。せっかくの休日なのに、また今日も家にいますのね」

嫌味たっぷりな感じがするのは、つり目の方だ。

「……………」

前髪の方は、まったくもって聞き取ることのできない小さな声でそう言う。

おそらく「おはようございます」と言ったんだろう。

「ああ、おはよう」

まあ、どちらにも慣れたもので……。とりあえず、俺は二つの見知った顔に挨拶を返した。

説明をしておこう。

彼女たちは陽香の友達である。

つり目の子が、たかみやすな鷹宮鈴奈。

前髪の子が、烏羽風乃。

二人とも、陽香が病を患った時から御見舞いに来てくれている。

『親友』。

きっと陽香と彼女たちには、そんな言葉が相応しいだろう。

「それでは、失礼いたしますわ」

と、鷹宮が靴を脱いで家に戻ってきた。

無遠慮な上に図々しい。

まったく、あかりと気が合いそうな奴である。

それに対して、

「……………うう……………」

烏羽は玄関で立ち往生していた。
どうしていいか分からない様子である。

見舞いを始めて、もう三年も経つんだから、いい加減慣れても良さ
そうではあるのだが……。

とにかく、だ。

「どござ」

そう促す。

俺の言葉を聞いて、ようやく我が家に上がる烏羽。

ちよこちよここと、二階に上がっていった。

「はあ」

大きなため息をつく。

なんでこう、俺とか陽香の周りには面倒で『普通』じゃない奴が集まるのかねえ……。

正直な話。

俺は『普通』から大きく外れたことが好きではない。

『普通』じゃない奴は、良くも悪くも注目される。

そして、色々な感情の捌け口になる。

憧れ

妬み

憐れみ

憎しみ

そんなのは面倒だろう？

だから、

人間は『普通』が一番だ。

コンコン

「はあい」

陽香の部屋のドアをノックすると、中から陽香の返事が聞こえた。
どうやら起きていたようだ。

「お茶菓子、持ってきたぞ」

そう言って、部屋の中に入る。

「ありがとう、お兄ちゃん」

「御苦労様」

「……………ます」

三者三様の返事が返ってくる。

それを聞いて、立ち去ろうとした俺に、

「あら？ どこに行くんですの？」

鷹宮の偉そうな声がかげられた。

ほんと、よく人ん家でここまで尊大でいられるな、こいつ。

と、心の中で毒づきながらも一応振り返り、質問はしてやる。

「何か用でもあるのか？」

「わたくしはないですわ。……でも」

そう言って、鷹宮は陽香の方を見る。

その視線につられて陽香の方を見ると、

「…………お兄ちゃん」

陽香が寂しそうな目で俺を見ていた。

その様子は、まるで捨てられた仔犬か仔猫のようである。

陽香がそんな目をする時は、決まって構って欲しい時だ。

そんな目をされては、立ち去れない。

で、結局。

「…………しょうがない」

俺は陽香の近くに行つて、腰を下ろした。

その途端に、陽香の顔が明るくなる。

その表情を見ると、少し安心する。

「今日は調子いいみたいだな」

「うん」

「でも、無理はするなよ？」

「分かってるよ、お兄ちゃん」

「なら、いいぞ」

陽香の頭を軽く撫でてやる。

十六歳、学年で言えば、高校一年生の妹に、こんなことするのは、些か子供扱いし過ぎかと思う。

だが、陽香はこうされるのが好きらしい。

普段、好きなことが出来ないのだから、この位はいいだろう。

「……ほんとに、仲よすぎますわねえ」

と、そんな俺たちの様子に口を出す不粋な輩がいた。

見れば、その不粋な輩たかみやは、俺たちのことをじと目で見ている。

「……………なんだ？」

「いえ、別に。ただ、年頃の兄と妹とは思えない仲の良さでしたの
で？」

「そう、かなあ」

鷹宮の言葉に俯く陽香。

それに吊られたのか、烏羽も何故か俯いていた。

ちっ、余計なことを……………。

心の中で舌打ちをし、毒づく。

もちろん、それは表には出さずに『普通』っぽく対応する。

「いいんじゃないか？ 仲がいいことは悪いことじゃないだろっ？」

「……………」

少し間があつて、

「……………まあ、そうですね。変なことを言つてごめんなさい、
陽香」

鷹宮がそう言った。

「え？ ううん、気にしてないから大丈夫だよ」

そう言った陽香にも笑顔が戻った。

これでいい。

陽香がこれ以上、元気を失うのは見ていられない。

俺の『夢』は、陽香が元気になることだと言った。

その『夢』のためにも、『普通』は必要だ。

俺が『普通』を演じれば、もしかしたら、陽香も本来の元気な姿を
……『普通』を取り戻すかもしれない。

……………。

……ああ、分かってる。
分かってるさ。

そんなのは、ただの願望だ。

俺が『普通』を演じれば、陽香が元気になるなんて、そんなことあり得ない。

そんな夢みたいなことが起きるのなんて、それこそ、

『夢』の中でもないよ、あり得ない。

3：遺

鷹宮と鳥羽は、陽香の体調を考えたようで、一時間ほどで帰っていた。

俺はその後、

「そう言えば、お兄ちゃんはさっきまで何してたの？」

という、陽香の一言で、自分の身体が汗ばんでいることを思い出し、当初の予定通り、シャワーを浴びた。

そして、ちょうど正午を回った頃に、母親が帰ってきたため、俺は妹の様子を見るのを任せて、家を出た。

特に、行く当てはない。

ただの散歩だ。

行き当たりばつたりの散歩。

無意識の散歩とも言えるかもしれない。

.....。

いや、それだと夢遊病が何かのような表現だな。

まあ、そんな全く建設的でもないことを考えて.....。

と、まあ。ここまでが過去の話である。

今現在の俺は、というと、

「なんで学校に来てしまったのだろう」

自分の通う高校に来ていた。

さっきも言ったように、これは散歩である。

別に、学校に思い入れがあるから来たわけでも、部活動をやっているから来たわけでもない。

つまり、理由はない。

まあ、強いてここに来た理由を挙げるならば、たぶん習慣だろう。
情性とも言つ。

行き当たりばつたりで、学校に着くというのも、些か微妙な心境ではあるが……。

「おい、司め」

不意に声がした。

俺は、ここまでハイテンションで人を呼ぶ人間を一人しか知らない。
というより、俺のことを名前で呼ぶ人間なんて、この学校で一人しかいない。

「……よう」

「おう、司！ 二日ぶりだな！」

案の定というか、なんというか、そこにいたのは、下地あかりその人であった。

「どしたの、こんな休日に」

小首を傾げ、そう訊ねてくるあかり。

「散歩」

「おお、なるほど!」

単語一つだけで答えると、あかりは納得がいったかのように、声をあげた。

……とは言っても、だ。

俺が休日に出ることなんて、散歩以外にはあり得ないのだから、予想はついていたのだろうが……。

もしかしたら、さっきのやり取りは、会話を繋げるためのきっかけ

を作ったつもりだったのか？

……いや、ないな。

先程までの考えを否定する。

あたりは、そこまで思慮深くないだろうし、第一、俺に対して、今さらそんな気遣いをする必要もないだろう。

「どした？ 考え事？」

「……いや、なんでもない」

難しいことを考えるのは、止めよう。

言葉の通りなんでもないのだ。

だから、

「じゃあな」

踵を返し、再び自由気ままな散歩に戻ることにした。

「……あっ」

「……つかさ……」

さて。

自由気ままな散歩と洒落こんだのはいい。

いいんだが……。

「ここはどこだ？」

俺は見知らぬ場所に辿り着いていた。

さっきのように、習慣やなにかで向かってしまつ場所ならば、まだよかった。

だが、360。見渡してみても、そこは相も変わらず見知らぬ場所であった。

当然か。

とりあえず、ここまでの道のりを思いだそう。

いくら自由気ままだと言っても、意識はあったはずである。

当然のことながら、学校に着く前に言った、夢遊病云々は、冗談であるのだから。

……。

「……あれ？」

首を思いっきり傾げる。

その理由は明解だ。

ここまでの道のりを思い出せなかったから。

である。

「いやいや、待て待て」

自分にそう言い聞かせる。

そうだつ。

待てつ。

そんなこと……思い出せないなんてことはないはずだ。

とにかく、冷静に。

冷静になれつ、天草司つ。

とりあえず、状況を確認しよう。

周りを見渡してみる。

周りは、何も無い。

そう、何も無いのだ。

ただあるのは白い空気。

今までテンパっていて気がつかなかったが、この白い空気は霧のようだ。

少し肌寒さも感じる。

………はっ？

いや、待てよ。

………霧？

………肌寒さ？

さっきまで、まさに夏と言わんばかりの晴天だったのに？

おかしい。

明らかにおかしい。

さっき、ここを見知らぬ場所と定義した時は、こんな霧も出ていなかった。

それ以上に、何もなかった気がする。

「何なんだ？　ここは、一体………？」

『教えようかい？』

「!？」

不意に声がした。

さつき学校で、あかりに声をかけられたのと、同じようなシチュエーション。

だが、その声に聞き覚えはない。

「だ、誰だ……？」

辺りを見渡すが、声の主はおるか、人っ子一人いない。

……空耳、か？

『いせいせ、いじだよ、いじ』

声は、上から、って、

「わあああああ！？」

思わず、思いがけず、悲鳴をあげてしまっていた。

痩せ細ったただの骨のような手足。

それを隠すようにしながらも隠しきれていない白いマスク。

そして、まるで、獣の面の皮を剥いで、そのまま張り付けたような仮面。

そんな化物が、空に、逆さまに立っていたのだ。

『悲鳴をあげることはないだろう？ ボクだって傷つくぜ？』

生々しい白い仮面が歪に歪む。

これは傷ついているのではなく、ただ笑っているのだと何故か理解する。

何故か分かった。

『ははは、中々にいいリアクションをするねえ』

『君、名前は？』

「……………」

『いやいや、聞くまでもなかったか、天草司くん？』

「……………」

『おやおや？ 悲鳴の次はだんまりかい？ 情緒不安定だねえ……………』

目の前で。

いや。

頭の上で、『それは言葉を放ち続けている。

「……………すう」

未だに混乱し続ける自分の脳に、酸素を取り込み、なんとか言葉を発する。

「……………」

『んん？』

「ここはどこで……………あなたは……………何だ……………？」

どうにか発したその質問に、『それ』は再び口元を歪めた。

『何、ね……誰、と聞かない辺りは、中々に冷静なようだねえ』

冷静？

そんなわけ、ないだろう。

もう一杯一杯だ。

今にも頭がパンクしそうだよ。

だが、『それ』の言葉を聞き逃さないために、俺は脳を、耳をフル稼働させる。

『……君の質問に答えよう』

『……は、君達の世界で言う『夢』の中で……』

『ボクは、ここに、』

『『夢』に巣食う、ただの『羊』さ』

『敬意を評して、『羊様』と呼んでくれたまえ』

『……天草、司くん』

この日、俺は出遭ってしまった。

一人の『羊』と。

『夢』の中に巣食うという一人の『羊』と。

俺の……俺達の日常と運命を変える一人の『羊』と。

4：羊

説明になっていなかった。

何者だ？

『夢』に巢食つ『羊』だ。

いや、訳が分からない……。

『訳が分からない？』

俺の表情を読んだのか、心の内を的確に当ててくる。

『表情を読んだ？ 違う違う、ただ君の心を読んだんだよ』

「……………は？」

『だから、君の心の声を聞いたのさ。理解してないの？ 頭悪いなあ……………』

「……………」

なんだ、こいつ。
異様にイラつく。

『はっはっ、頭悪い上に心も狭いのかあ。救いようがないねえ』

癩に障る奴だ。

……が、どうやら。

こいつには、隠し事はできないようである。

例え、心の中のことであろうと、だ。

それは理解した。

『やっと理解した？』

「……ああ、不本意ながらな」

『そうかい。まあ、でも……』

そこで一旦言葉を区切り、口元を歪に歪めて、笑っ化け物。

そして、

『前話のタイトル『遭』だったけど、まさかこんな化け物と遭うとは思わなかっただろう?』

「……………」

まさかのメタ発言である。
なんかもう一杯一杯メタである。

危険なことは止めてほしい。

『おっと、ごめんごめん。ついっいはしゃいでしまったよ……………久しぶりだから、ね』

「……………で、なんで俺はこんなとこ……………『夢』の中において、あんたみたいなのと会っているんだ?」

「それに……………」

「あんたはなんだ？」

とにかく話を進めよう。

これ以上こいつと話すと、血圧が上がらそうだ。

それに、心が読めるのは理解したが、こいつが何者なのかはまだ理解していないし。

『そうだね。頭も心の広さもどうしようもない君には、その辺から話そうか』

「……………」

納得いかない。

いかない、が、今は黙ろう。

ここで突っ込んでいたら、話が進まん。

「まずは、改めて質問だ。ここは結局どこなんだ？」

『そうだねえ』

『現実世界以外の世界、たとえば少しは理解できるかい？』

『そして、この世界……夢世界は、』

『ボク達が生きる世界であり、君達、現実世界の者が見る『夢』でもある』

『つまりなんて表現を使わなくても、今、ここは君の『夢』の中であり、ボクが生きる世界なのさ』

『理解した？』

「……………」

内容だけならば、理解はした。

ここは、俺の『夢』の中であり、この化け物が生きている世界。

まあ、ファンタジーやらならありそうな設定ではある。

だが、それが納得できるかというのは別の話だ。

理解は出来ても納得は出来ない。

『納得なんていらないよ』

『理解すればそれでいいのさ』

またも心を読んだ『羊』は、

『それで、次はなんだい？』

腕を広げて、俺に質問をするように促してくる。

「…………お前は」

「お前は、何者だ？」

俺は『羊』の催促を受け、本命の質問をぶつけた。

その質問に、

『……何者……ねえ』

『『夢』の中に住む『羊』さんで、他世界への干渉を行うことが出来る唯一の者』

『そんなところかなあ』

『わかったかい？』

……と。

『羊』は、まるで台本に書かれたことを、ただ読み上げるような口調でそう答えた。

こんなに生々しい外見であるのに、機械的に……。

『機械的に？ はははっ、面白いことを言うねえ、君は』

『このボクのどこが機械的だい？』

『むしろ、情緒的で感情的じゃあないか』

「……………」

「どこが情緒的で感情的だ。

こんな化け物に情緒も感情も風情もへったくれもないではないか。

おっと、いけない。

また話が逸れてしまっている。

まったく、本当に、いちいち話が滞るな……。

『そつだねえ。一体誰の仕業なんだろうっねえ』

「お前だよ」

即答してやった。

『真顔でさらりと責任を押し付けてくるね、君は』

『しかも、中々に力のある即答だ』

『そうだねえ、君はきつといいセールスマンになれるよ、うん』

『まあ、それはいいや』

『で？　なんだっけ？』

『ああ！　責任とかの話だね』

『……まあでも、それは違つたらう？』

『君とボクの過失はフィフティーフィフティーさ』

「どこがだ。話を率先して逸らしているのは、紛れもなくお前だよ」

今まで黙っていた分の言葉をここで発する。

そう、責任は間違いなく、この饒舌な『羊』にある。

だって、まず俺、こいつに話を振っていないし。

まあ、心の中では、色々と言っているが……。

だが、口には出していない。

だから、過失は

『いやいやいや、君にもあるよ』

「だからっ」

『君は知っているだろう?』

「はっ?」

『真実を、事実を、知っているだろう?』

いきなり、脈絡もなく、唐突に『羊』は、そう言い放った。

真実?

事実?

なんだよ、それ……。

どうやら、心の中でだけ呟いたこの言葉も、『羊』には聞こえていたようで、

『はっはっ、なんだか真実とか言つとややこしくなるね』

『つまりは、』

『ここでは、思ったことがボクに伝わる、という事実……真実だよ』

『真実から目を逸らすなよ』

今まで、ふざけていた分、今のこいつには、迫力があつた。

迫力はあつた、のだが……。

「なんの、話だ？」

何を言いたいのか、分からない。

心当たりなんて一切ないのだから、分からなくて当然だろう。

少し、沈黙。

時間にしたら、五秒にも満たないであろう、静寂。

それを破ったのは、

『……………ふっ、はっはっはー!』

『羊』だった。

何が面白いのか知らないが、笑う。

……………いや。

面白い、というより、むしろ

『そうそう、君の言う通り……………いや、思う通りの方が正しいのか』

『まあ、つまりは、』

『哀れんでいるのね』

ますます、意味が分からない。

哀れんでいる？

なぜ？

なぜ俺は、ほんの十数分前に会ったばかりの謎の化け物に、哀れみを向けられているんだ？

『……………まあいいや』

『で、他に質問は？』

「……………あ、ああ……………」

哀れみの理由が気になる所ではあるが……………、

「お前……………」

話を進めた。

どうせ、また雑談やら戯言やらの類いだと思っていたのもあるしな。

なにより、『羊』が放ったある言葉に強く引っ掛かっていた。

そのせいで、哀れみの理由が些細なものだと感じていた節もある。

で、その引っ掛かっていた言葉というのが、

「他世界に干渉できる、ってどういことだ？」

それだった。

『へえ、案外聞いていないようで、聞いているんだねえ』

『羊』は感心したような台詞を、感心した素振りを見せずに言う。

ちぐはぐだ。

『ちくはぐでもなんでもいいだろう?』

『まあ、説明をしよう』

『ボクは、他世界に干渉できる』

『まあ、そんなことが出来るから、こうして君と会えているんだよ』

『えっ? そんなことはどうでもいい?』

『干渉の方法と効果?』

『……簡単だよ』

『こちらの世界で行ったことが、現実の世界に反映される』

『ここで何かをすれば、現実になんか起こる』

そこで、『羊』はニヤリと口の端を歪めた。

『例えば……』

『関わるはずのない二人が友達や恋人になったり』

『交戦中の国々が友好条約を結んだり』

『偉人の暗殺を防いだり』

『そして……』

『原因不明の病気を治すことだって可能さ』

「っ!？」

他世界への干渉。

その言葉が出た時から、期待はしてたし、予想もしていた。

だが、確信はなかった。

けれど、今の一言で確信した。

「……俺は」

『ん？』

「俺は、『夢』を叶えられるのか？」

『『夢』？ なんだい、それは？』

俺がそれを思っているんだ。

だから、『羊』にも分かっているはず。

だが、あえて聞いてきた。

それは果たして、今までと一緒の、人を馬鹿にしたような質問なのか。

それとも。

『夢』を叶える覚悟を、『事実』を変える覚悟を問っているのだろうか？

……。

どっちでもいい。

どちらでも、俺の『夢』は変わらない。

だから、答えた。『羊』の問いかけに。

「俺は、妹を助けたいっ！」

5：動

『妹を助けたい』

『……なるほど』

『それが君の『夢』って訳だね？』

俺の言葉を受け、『羊』はそう言葉を返してきた。

それに俺は黙って頷く。

『ふむふむ』

『まあ、いいよ』

『ボクのを貸すのはやぶさかではない』

『どうせ暇だったからね』

『ははは』

『羊』が笑う。

相変わらず感情が込もっていない適当な笑い声ではあったが……。

『…………ふう』

『いやいや、しかし意外だね』

「？ なにがだよ？」

『もうすっかり落ち着いてるから、君』

「……………」

そう言われれば、確かに、だ。

こいつを最初見たときは、その外見の気持ち悪さにかなり驚いていたが……。

『気持ち悪いとは心外だなあ』

『ワイルド、と思ってくれよ』

「……それは無理な相談だ」

こんなやり取りも出来るようになっていく。

あまりに自然に。

『……君ってさあ……』

「あ？」

いきなり話しかけてきた『羊』の方に、意識を戻す。

『羊』は、口許を歪めていた。

笑っていると表現もしたが、この方がやはり合っている気がする。

とにかく、『羊』は口許を歪め、

『君ってシスコン？』

「ちげええよっ!」

即答した。

速答してやった。

『いやいや、端から見たら、そのものだと思っよお』

『普通、現実を変えられるって言ったら、思春期男子ってやつは、脳味噌が煩惱で溢れかえるものだろう?』

「なんだ、その嫌な偏見は……」

外見の不気味さが台無しじゃねえか……。

聞こえているはずの突っ込みをスルーし、『羊』は、さらに、下らない話を続ける。

『例えばだねえ……』

『妹と血の繋がりが無いことにしたい、とか』

『妹が自分のことを變するようになりたい、とか』

「だから、俺はシスコンじゃねええ!!」

こいつは、一体俺をどついつ目で見てるんだ。

『あっ、そつだそつだ』

と、『羊』は抑揚も感情もない口調で、いきなり話を切り出してきた。

というか、会話の流れをぶった切ってきた。

なんだ?と訊ねると、『羊』は、またも口許を歪めながら答える。

というより、独り言のように呟いた。

『現実を変えろということとは……』

『『普通』じゃないからね？』

「……っ」

咄嗟に、言葉が出なかった。

見抜かれるかもしれない、とは思っていた。

だが、あまりにもあっさりと、そんなことを言う『羊』に。

俺のもう一つの願望をいとも簡単に指摘した『羊』に。

何も言い返せなかった。

……確かに。

確かに、俺は心のどこかで天秤にかけていた。

普通であること。

妹のこと。

その二つを比べて、いた。

それをこいつは、指摘したのだ。

……………っ。

でも、俺はっ。

『……………ふむ』

と、ここで『羊』は、俺の返事を妨げる形で、声を発した。

そして、そのまま腕を組み、押し黙った。

今までの会話の脈絡をブチ切る沈黙が流れる。

いや、今までも脈絡なんてなかったが……………。

「どじしたっ？」

不審に思い、声を掛けた俺に……

にやっ

『羊』は、笑った。

「っ！」

気付くと、俺は飛び起きていた。

……ん？

飛び起きた？

えっ……。

「司！」

俺を呼ぶ声。

その声の主は、

「……あかり？」

「うん」

あかりだった。

心配そうな表情を浮かべて俺を見下ろしていた。

心配性という言葉とかけ離れている存在である、あのあかりが、だ。

「どうしたんだよ？ 変な顔して」

そう声をかけた。
いつものようにだ。

だが、

「どっしたじゃないよっ!」

怒鳴られた。

……えっ、なぜ?

「あー……あかり?」

「なんか司いきなり倒れたんだよっ!」

「……」

といつことらしかった。

「……ふむ」

一旦、情報を整理してみよう。

珍しく心配してくれているあかりには悪いが、俺も今、整理しないと訳がわからなくなりそうな気がする。

まあ、もう十分訳がわからなくなっているが、それは言つまい。

で、だ。

さっきまでの状況はこうだ。

まず、俺はあかりに会った後、気がつくど、あの何もない場所にいた。

その場所で、あの不可解な『羊』に会い、話をした。

『羊』の話によると、あの世界は、俺の『夢』の中の世界だという。そして、たった今、その夢世界とやらから帰還した、と。

「……………」

次は、あの不気味な『羊』そのものについてだが……。

あいつについては、分かったことなんて、ほとんどない。

強いて挙げるならば、『夢』の中に住んでいる。

そのことくらいだ。

「……………司？」

っと、そうだった。

「心配かけた。ずっと見ててくれたんだろ？」

心配そうにするあかりに、お礼で返す。

あかりは、図々しい奴だが、同時に、うちの妹の世話をしてくれる世話好きでもある。

きつと今回も、体感時間にして、約十五分。

その間、ずっと側にいてくれたに違いない。

そんな俺の考えは、

「……………ずっとってほどじゃない」

あかりの次の一言によって、否定された。

「司が倒れてたの……………一分くらいだし……………」

「……………は？」

……………一分？

そんなわけはないだろ！？

あの『羊』に驚き、下らないやり取りをし、説明を受ける。

それを一分やそこらで出来るか？

答えは否だ。

賭けてもいい。

絶対無理だ。

なのに、あかりは、

「一分くらいだった」

「正確には分からないけど……」

「えっ？ 十五分くらいじゃないかって？」

「それはない。私はそこまでアホじゃない」

「……………むっ」

一体どういっわけなんだ？

結局、謎は謎のまま残り、むしろ増える一方で……。

俺はもやもやした気持ちを抱えたまま、家に帰り着くしかなかったのだった。

いつのまにやら、俺は、

時間の感覚も。

重力の概念も。

生物の常識も。

まったく通用しない世界。

そんな奇々怪々な世界に迷い込んでしまったようだ。

いつから？

どこから？

そして、何のせいぞ？

迷い込んだばかりの俺が、それらの答えを知るはずもなく……。

だが、そんな俺の都合など

お構い無しに、確実に歯車は動き出し始めていた。

運命を、現実を変えるための歯車が。

カラカラと。
ギシギシと。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0577y/>

我等は羊の夢を見る

2011年12月12日00時45分発行